

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)  
プロジェクト研究(重点領域プロジェクト研究)

2012年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属・職名	氏名		
	社会学部・教授	阿部 治 印		
研究課題	課題解決型シミュレーションを用いたESDプログラムの研究開発			
研究組織	所属大学名等・職名	氏名		
	<b>【分担研究者】</b> 立教大学・教授 立教大学・特任教授 立教大学・特任准教授 立教大学・教授 立教大学・助教 立教大学・教授 立教大学・特任教授  <b>【研究協力者】</b> 立教大学・院生 東北学院大学・院生	関 礼子 高野 孝子 上條 直美 高木 恒一 黒田 暁 村田 次郎 平井 朗  廣本 由香 今村 瑠美		
研究期間	2012 年度 ～ 2014 年度			
研究経費	2012 年度	2013 年度	2014 年度	総計
	8,468千円	8,241千円	11,667千円	28,376千円

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、ESD(持続可能な開発のための教育)が本来持つエンパワーメントの手法を応用し、原発事故からの復旧・復興プロセスを住民/市民、自治体、そして社会全体で共有・創造するに資することを目的とする。

そのために、(1) 原発事故からの復旧・復興および今後の持続可能なエネルギーに関し、社会全体で将来ビジョンを共有し、政策決定過程への市民参加と社会合意を形成するための課題解決型政策シミュレーションを用い、復旧・復興へのプロセスを共有・促進する、(2) 文献・データの整理分析、避難住民等へのヒアリング、原発事故後の福島における教育教材作成などから、復旧・復興のための政策促進に資するプログラムを開発する。

(299字)

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ESD] [原発事故] [エンパワーメント]

## 研究【 経過・成果 】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、ESD が本来持つエンパワーメントの手法を応用し、持続可能性の危機をもたらした原発事故からの復旧・復興プロセスを住民／市民、自治体、そして社会全体で共有・創造するに資することを最終的な目標としている。

福島原発事故による避難区域内の自治体や避難住民の生活の復旧が急務であるが、そのビジョンやプロセスは断片的かつ曖昧模糊としている。復旧のための自治体施策は住民の意向を反映させ、国とも協議して策定されることになるが、住民は年齢層や職業、家族構成によって考えが相違し、国も自治体や住民の意向抜きに復旧・復興施策を提示しえない。国（マクロ）－自治体（メゾ）－住民（ミクロ）が三すくみ状態になって原発事故への対応が遅れ、結果、復旧までの全体像が見えない現状にある。

本研究は、主として避難区域設定にともない役場機能に移転した各自治体が検討せざるを得ない具体的な課題を析出し、想定される課題解決とそのプロセスの各段階で生じる諸問題や、それぞれの段階に到達する時間という不確定要因に左右される政策実施コストや人口流出による高齢化の進行などの課題を示し、自治体の政策策定と住民の政策決定過程への参与を迅速に行うための課題解決型シミュレーションの手法を打ちたてようとするものである。

研究着手 1 年目にあたる 2012 年度は、諸般の事情により秋以降の研究開始とならざるをえず、当初計画の①震災から 1 年の自治体ごとの動向の年表作成、②市民活動資料の分析、③施策選択のための過去の災害・社会問題等の事例抽出と参照データの分析、④暫定版の課題解決型シミュレーションの策定とそれに基づく ESD プログラムの開発・施行のうち、③～④に関し、以下のような調査研究、シンポジウムなどを実施して既に結果を公表済みである。

【1】福島原発事故の風化が懸念させる状況において、原発事故の被害と向き合い、福島の「今」を考えるための連続講演会の実施（ESD 研究所と連携）。避難者支援のあり方や避難者の自立支援の重要性、放射能汚染下で暮らすための「生きる学び」やリスク逡減などについて、講師と共に考え、議論した。また、連続講演会の記録を『講演録 福島の今と向きあう。』として公表した。

【2】福島原発事故問題との共通点に自覚的になり、福島との交流を通して情報発信をしている水俣病センター相思社を窓口の水俣調査・意見交換を実施し、「もやい直し」や環境への取組みを通じた社会関係の創造、市民の誇りを取り戻すプロセスについて学んだ。また、関東からの広域避難者（福島県も含む）へのヒアリングを行った。その結果は『水俣調査報告書 水俣病から福島原発事故を考える』として纏めた。

【3】福島第 1 原発 20 キロ圏内の自治体からの避難している方々、自治体等へのヒアリングを実施した。関連するが目的を異にする調査研究と連携し、避難している方々の生活、個々人が抱える問題や憤りなどを表現する場（写真展）を創造した。また、お写真を提供していただいた方々の「声」をあわせて『被災・避難生活を写真で語る福島県檜葉町、私たちのいま』を作成した。

【4】福島原発事故と ESD を災害教育の議論に埋め込む試みとして、日本学術会議公開シンポジウム「災害と環境教育－内発的な ESD からの復興の筋道の展望」を立教大学 ESD 研究所とともに共催し、研究メンバー 2 名がコメンテーターとして登壇、パネルディスカッションに参加した。当日の議論の様子は ustream 配信されている。

(なお、【2】【3】に関しては個々人の「語り」が不特定多数に公開されることで被るかもしれない想定外のリスク等に鑑みて、紙ベースで限定的に公開するが、HP などでは公開しない旨の相互確認を行なっている。)

## 研究【経過・成果】の概要 つづき

個別の作業進捗状況は下記のようになっている。

①の自治体ごとの年表作成に関しては、震災後1年の複数の新聞や情報媒体を用いて震災後1年間のデータを整理・入力作業をすすめてきた。その結果、以下のようないくつかの注目すべき項目が浮かび上がってきた。

- ・避難における自治体の判断の相違と地理的・社会的布置の関係性
- ・災害直後の自治体の独自判断と以後の国の政策判断とのパワーゲーム
- ・瓦礫処理や中間貯蔵施設建設計画をめぐる政策判断
- ・避難先と福島原発事故対応に関する被災者・避難者の意識差との相関 など。

今後はこれら論点を抽出してシミュレーションを形成することになるが、それに先立ち、復興計画などの自治体策定状況とその内容を精査する作業に入っている。

②の市民活動資料の分析に関しては、震災後1年の資料リストに内容分類をほどこしながらデータ化をすすめており、既存の市民活動が捉えた論点を抽出している段階である。

関連して、③施策選択のための過去の災害・社会問題等の事例抽出と参照データの分析については、公害・環境汚染の事例を複数参照しながら事例研究をすすめた。なかでも水俣病に関しては、その問題構図の類似性にかんがみて現地調査を実施するなどしながら、以下のような論点を抽出した。

- ・サイエンス・コミュニケーションとリスクの問題
- ・基準の恣意性の問題と社会的妥当性の論拠
- ・差別や社会的排除の問題
- ・「故郷」をめぐる世代間の意識差
- ・被害を受けたコミュニティの再生に関する展望

④暫定版の課題解決型シミュレーションの策定とそれに基づくESDプログラムの開発・施行

課題解決型シミュレーションとして図示していくための基礎データを整理しつつある段階であるが、それに先行してどのようなESDプログラムが展開可能であるかを試験的に実施した。

震災後2年が経過し、状況や立場の相違から、問題を正面から論じにくい雰囲気醸成されてきていることから、それぞれの避難経験と問題認識をヒアリングを通して明らかにし、他者と共有できる部分を個々の判断で公開していくという作業を実施した。

このような場の創出のなかから、当事者調査（放射線測定など）の機運を高めて行くこと、当事者の語りを用いた学校教材の作成などの動きを送出していくことを今後の課題とする。

また、福島県外避難や関東から広域自主避難している方々の状況などに鑑み、福島原発事故問題を各地でいかに自分事にしうるかを明確に示していく必要がある。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

平井朗「立場の異なる者のあいだの連帯は可能か—水俣とネグロスにみる当事者、そして市民」『異文化コミュニケーション論集』第11号、2013年、29-41頁

② 図書

高木恒一ほか編、2013、『戦後日本住民運動資料集成8 三島・沼津・清水町石油コンビナート建設反対運動資料』すいれん舎

関礼子 2012「流域の『自治』をデザインする—絆をつなぐフィールドミュージアムの来歴」桑子敏雄・千代章一郎編『感性のフィールドワーク』東信堂、67-87

③ シンポジウム、公開講演会

天野和彦「あの時、避難所は… “おだがいさま” が支えた 169日間—福島県内最大級の避難所「ビッグパレットふくしま避難所」が教えてくれたこと—」2012年11月7日、立教大学

國分俊樹「フクシマ放射能汚染と人権」2013年1月22日、立教大学

広瀬要人「大いなる田舎飯館村に放射能が降った—学校教育再建・復興への取り組み—」2013年1月28日、立教大学

河田昌東「食の安全と放射能—放射能汚染環境下での暮らし—」2013年3月5日、立教大学

「災害と環境教育—内発的なESDからの復興の筋道の展望」、2013年3月17日、日本学術会議(共催)

④ その他 (学会発表、研究報告書)

Osamu Abe, Current Status of International Environmental Education and Development Experience: Japan, 台湾環境教育学会 2012年大会, 2012年11月10日, 台湾師範大学(台北、台湾)

Osamu Abe, Education for Sustainable Development (ESD) and Local Resilience through Japan's experience, International Conference "Resilience: Japan and New Zealand Moving Forward", 2012年12月3日, The University of Auckland (オークランド、ニュージーランド)

関礼子「福島原発事故と生活(life)を考える日本農村生活研究大会 2012年11月24日、共立女子大学

関礼子「「フクシマ」論と「コミュニティ復興」論を超えて—「生成する復興」論への試論—、環境社会学会大会 2012年12月2日、東京首都大学

平井朗「サブシステム回復のためのコミュニケーション—3.11 原発事故被災者を中心に」環境・平和研究会、2012年9月15日、立教大学太刀川記念交流会館

平井朗 Purpose, Method, Advantages and Background of the Exposure: From the experiences in Negros Island, the Philippines 国際平和研究学会・2012年11月25日、三重大学

文部科学省報道発表「文部科学省による放射線量等分布マップ」(放射性セシウムの土壌濃度マップ)の作成について 平成23年8月30日付(村田次郎が土壌採取及び分析を分担。科学技術戦略推進委託事業「放射性物質の分布状況等に関する調査研究」にて実施、分析機器を本研究で整備)。

田沼良介, 村田次郎他、日本物理学会概要集「ガンマ線抑制型 90Sr 非破壊検出法の開発、第67回年次大会、27aGC-1、2012 (原発事故に伴う環境放射能測定法の開発)

立教大学 ESD 研究所・立教 SFR 重点領域研究『講演録 福島の今と向きあう。』2013年3月(報告書)

立教 SFR 重点領域研究『水俣調査報告書 水俣病から福島原発事故を考える』(報告書) 2013年3月

立教 SFR 重点領域研究『被災・避難生活を写真で語る 福島県檜葉町、私たちのいま』2013年3月

立教 SFR 重点領域研究『写真展 福島県檜葉町、私たちのいま』2013年3月20-21日、会津美里町檜葉町応急仮設住宅敷地内北集会所

